



自叙伝抜粋 ＊＊＊

私が見てきた千葉県の花き生産と普及事業について

小泉 力

農業改良普及員として

花が日本国中どこでも見られるのが当たり前になったのはそんなに古い時代ではない。

戦時中にほとんど壊滅した花生産は戦後の復興と共に復活してきたが、戦前に千葉県で食糧増産のため花生産が禁止されたように、花は贅沢品だという考えが支配していた。戦後復活した花生産は進駐軍や豊かな層の需要を対象にしていたが、その後急速に増加してきた。

私が千葉大園芸学部に入学したのは昭和31年。その頃、農学部ばかりの中で伝統の千葉高等園芸を継ぐ園芸学部は全国で唯一。当時の花卉園芸学は穂坂教授、浅山助教、午後の実習は両先生から直接指導を受けた。花卉専攻は希望者多数で、穂坂先生の「だめですわ」を恐れて河村先生の植物病理学教室に行った。

35年に卒業したが、当時就職は厳しかったので農業改良普及員の資格を取っておこうと千葉県で受験したら1番で合格した。幸い千葉県の採用試験に通って赴任したのが、成田空港ができる以前の成田農業改良普及所だった。当時の千葉県はどこにもある農村風景で、広い田ん圃から谷津田に繋がる美しい里山が今でも目に浮かぶ。

昭和30年代の千葉県の花産地は房州のみが切花産地で、試験研究と指導を行っていたのは館山市にある千葉農試安房分場の林角郎氏（昭和24年卒）が唯一の担当者で、氏を中心に行われていた。

林脩巳氏のこと

房州は東京に近く無霜地帯もある温暖地で、明治、大正時代から全国屈指の花産地であった。この温暖地

の更なる園芸振興を目的として県は昭和8年に安房分場を設立したが、これを設計・施工したのは県立農事試験場技師の林脩巳氏である。

明治・大正時代の千葉県立園芸専門学校講師で花卉と造園を教えていた人で、穂坂八郎先生も教わった云わば本学部草創期の花卉の先生である。氏は初期の新宿御苑で福羽逸人氏の弟子となり、イギリス、フランス、アメリカで花卉と造園を研修し、草創期の日本の花卉と庭園に果たした業績は大きなものがあり、当時の記録には林脩巳の名前が見られる（因みに園芸学部のフランス式庭園は林氏が設計した。また大正10年頃現在の船橋市に球根植物試験場を作りオランダからチュールリップ500品種ほど輸入栽培した等）。

その後千葉県に移り農事試験場で園芸の指導をされたが、余り知られていないので特に記載させて頂いた。

園芸行政と鉢物研究の始まり

昭和30年代に話を戻すと、県北部には花産地は無く、私は野菜担当の普及員であった。当時、千葉県農業試験場場長は大先輩の森田三良氏（3代目戸定会会長・昭和8年卒）であった。今後、鉢物が盛んになると予測され、本場に花の研究室をつくることになったのだが、その時に私に試験場への転勤辞令が出た。

農業改良普及員として勤務したこの時期は日本農業の大きな転換期で、昭和36年制定の農業基本法によりわが国の農政が米穀中心から農業の選択的拡大として果物・野菜・畜産物に転換する儲かる農業へと農政が展開された。これによって新しい園芸産地化が全国に進められたが、花き園芸はまだ少数派であった。

千葉農試本場で花の研究を始めたのは昭和39年で、最初は鉢物・観葉植物・温室メロンをやるということで

温室栽培研究室として発足し、研究員は室長(岡田淳氏20年卒)と私の2名であった。

その頃、県の農業行政首脳部のある人は「花は房州の切花があればいいじゃないの」というような見解で、園芸作物とは果樹、野菜であった。この考え方は当時としては普通のこと、ましてや鉢物生産がこれほどに伸びるとは予想もしていなかったであろう。そんな中で鉢物や施設園芸が発展すると予測した森田場長の卓見と英断はさすがに園芸学部出身の方である。

その後植木ブームが起きて鉢物と植木を研究するとして花植木研究室となった。千葉県の花き研究は安房分場が独立して暖地園芸試験場となり、花き研究室が切花を担当し、県南は切花、県北は鉢物・植木という体制となった。

また、県の花き行政を担っていた人に県園芸課で花植木係長だった大綱昇氏(昭和32年卒)がいる。氏は花卉専攻で県庁内での専門家として房州の若手生産者と強い信頼関係を持ち、千葉県花卉連研究部を率い、林角郎氏と共に花卉振興を盛んに行った。これが千葉県花卉生産者5000人余の牽引力となり房州を中心とした切花の産地振興に資するところが大きかった。

球根ベゴニアについて

私が試験場に赴任した頃は県内に鉢物生産はほとんどなく、千葉農試も同様であった。当時の先進地は東京都や愛知県、奈良県で、鉢物研究は地方農試が盛んで、東京都の鶴島久男氏(23年卒)、工藤忠氏(26年卒)が関東ブロックでシクラメン他の研究をリードしていた。

そんな中、少ない栽培事例を見ながら手探りでシクラメン、シネラリア等で栽培試験を始めた。良いシクラメンを作れば高く売れたが、用土がブラックボックスであった。各県の新人研究員が取り組むテーマは、農家の悩みが用土であったから、用土と肥料の試験が多かった。

昔も今も同じだが、新商品が出来てヒットすればそ



球根ベゴニア 日長時間が生育・球根肥大に及ぼす影響

の生産は伸びる。花は新しい種類、品種が登場すると人気が出る。花の研究の一つは新しい花卉の開発にある。私が選んだ新しい花卉は球根ベゴニアであった。戦前には美しい花として知られていたが、戦後は江戸川分場の田中氏が研究していたくらいだった。

教育大学農学部の岡田正順先生(14年卒)が学会で電照栽培で早出しが出来ると発表したので、自分もその実用化を目指した。球根ベゴニアは長日性植物として知られ、秋から冬を通して電照栽培すると早春から開花する。電照方法についていろいろ調べたが、日長時間によって生長と休眠の関係が劇的に変わり、開花や球根肥大にはっきり現れるので、この研究が一番面白かった。その当時長野県辰野町吉江晴朗氏の良い系統があり、この品種を用いたので美しい大輪の花が見事に咲いた。

千葉県内の鉢物生産者にとって、オリジナル商品だったので一気に普及した。しかし、早く出した方が得だと、寒さが厳しい3月初めから早出し出荷する人が出て、数年で人気落ちてしまった。

その頃、リーガースベゴニア(エラチオール)が導入され、球ベゴの生産者はこれに転換した。エラチオールは球ベゴとの交配といわれ、日長反応などに共通性があり、開花習性も似ていたので栽培のコツが理解できたせいか、千葉県はいち早く主産地となった。

雑談的で恐縮であるが、球根ベゴニアの開花調節の



球根ベゴニアの花

研究はその後だれもやった人はいなかったと思われるが、思わぬところでこの花が注目された。何年前の事だったか、2月某日のテレビで日本海を隔てた国の将軍様の誕生日の花として紹介されていたのは、なんと真っ赤な大輪の球根ベゴニアだった。この季節にこの花を咲かせるには温室で加温し電照栽培しなければ決して花を見ることはできないはずである。そのためには施設、暖房、電照、技術、品種が揃わなければならない。貧しいといわれる彼の国で技術者はどのようにして栽培しているかと思わずにはいられない。

専門技術員の仕事

千葉県は東京に隣接し立地が良かったので、鉢物は新産地としていち早くその地位を占めた。若い生産者は愛知県、神奈川県などの先進地に研修生として2年間の修行をして帰り、生産を始めたが、親の反対を押し切って始めた例も多かった。今になると夢のような話だがみんなが儲かってどんどん規模拡大ができた。

また、千葉県では生産者組織が早くから出来て活発に活動したのが技術向上に役立った。その裏には県の普及組織の指導がある。新技術は専門技術員(専技)が普及員を指導して農家に普及する体制であった。当時は全国的にも花きの専技は少なかったが、千葉県はシクラメンの権威者として知られていた第一園芸の樗木忠夫氏を招き、氏の指導で県内の鉢物が盛んになった。特に若い生産者を組織化して、鉢花生産者連絡協議会と観葉生産者連絡協議会の2組織を立ち上げた。これにより各郡単位の支部組織ができて自主運営の活動が

行われた。運営には事務局が必要で、これを花き担当の普及員が受け持った。このシステムは非常によく機能し、若い生産者の交流をはかり技術を向上させたと思う。

しかし一つ困ったことがあった。即ち普及員は地域を担当し、その区域の農業を指導するのが決まりで、鉢物生産者は県内各地に分散しているので管轄外の農家は指導できない体制があった。

そんな問題を抱えながらの鉢物産地指導があった頃、私は昭和58年専技になった。専技の仕事は技術指導だけでなく、連絡、調整等多様である。そこで事務局は生産者組織の会長が所在する地域の普及所長指導の下で花の普及員がやることにした。もともと正式なものではないが、これにより花の普及員は千葉県全体の鉢物生産者を指導でき、生産者も情報交換し合い、共に発展してゆく組織となった。その後もこの組織は発展し、他県に無い活発な活動を展開して今日に至っている。

千葉県の洋ラン生産者は県全域に分散していたが、洋ランも組織化の機運が起り、東金市の土屋修三氏(昭和36年卒)が千葉県洋ラン生産者組合として組織化し、事務局は県園芸課が担当した。

試験研究と専技

洋ランについては花植木研究室の遠藤宗男氏(38年卒)が試験を行った。土壌肥料が専門だったが当時洋ランを水耕栽培で研究していて、コチョウランの根が水中に伸びて開花しているのにはびっくりした。

その頃千葉県ではゴルフ場の農業が問題になり、時の沼田武知事から千葉県のゴルフ場無農業宣言が出た。急遽農業試験場で芝の研究が始められ、花植木研究室室長の遠藤氏がその総括責任者となり、芝生研究の先駆けを担った。

農試の鉢物研究ではシクラメンの培養土の研究で斉藤俊一氏(平成3年卒6年博士課程)は浄水土を活用した用土を実用化し、商品化に到っている。

一方、千葉県の切花研究は先述の林角郎氏が暖地園芸試験場で一貫して行って来たが、アイリスの燻煙処理による開花調節を初めとして、房州で栽培されてい

る切花、花木のほとんどを手がけている。堀川照男氏(専攻科花卉43年修了)は、新しい研究課題として当時その性質がよく分からなかったグロリオサやサンダーソニア等を研究し、普及した。その後専技として県庁に移り現場を良く知った専技として活躍した。

私の専技期間は昭和58年から10年間であったが、専技は新技術をいち早く普及員に伝える必要上、試験研究の関東ブロック会議や全国会議などにも参加したが、そこでは研究職出身者も多く、千葉大園芸学部出身の林角郎、工藤忠、村井千里等の先輩方や同窓生が活躍しておられた。

県庁退職前の役職で平成5年暖地園芸試験場に行ったが、当時から農業生産も頭打ちとなり、これまで研究テーマとしてはタブーだった観光農業をテーマとして取り上げた。これも地元の園芸振興には必要と考えての判断であった。

退職後に経験したこと

退職後は千葉県地域整備協会に再就職した。ここは千葉県が造成した海岸埋め立地、幕張メッセ、県立公園の緑地管理等をしていた。因みにこの協会は設立当時、先述の森田三良氏が理事長で、自ら樹木を植える段階から指導し、基礎を創られたと聞いている。

ここでの庭園樹や花壇の管理は初めての経験だったが大変勉強になった。庭園樹は植え付け当初は良いが年月と共に繁茂して管理が難しくなるなど問題が起こってくる。幕張メッセで思い出すのはカナルのアオコだった。下水の再生水を使っていたのでNPが含まれ次亜塩素酸ソーダを撒いても直ぐに発生した。設備を作ったクボタの技術者といろいろ検討した結果ようやく抑えることができて、今行っても澄んだ水になっているのがうれしい。

協会在籍中の平成7年に千葉県で緑化フェアが行われ私も参加した。この時のテーマに「懐かしいダリア」と題してダリアをとり上げた。提唱者は川上幸男氏(25年卒)で、呼び物に皇帝ダリア(*Dahlia imperialis*)を小石川植物園から分けてもらい植えた。ところがこのダリアは短日性植物であり会期は8月から10月25日迄、植えただけでは会期中に咲かないのは明らかである。そ

こでデータはないがぶっつけ本番で短日処理をした。大きなやぐらを建てて黒幕で朝夕開け閉めして2ヶ月。閉会の3日前にやっと咲いた。

ダリアでは育種家の小西勇作氏(31年卒)と黒相淳氏が県内在住でダリアコーナーを設け花を添えた。その時小西氏が出品された鉢植の巨大輪の数々は見事だった。現在も千葉市内で卒業以来ダリアを育種し、世界的名花を出している。

この協会を定年退職後は個人として好きな花や植物に関わる仕事をしたいと思っていたが、幸いにも緑の相談所や園芸相談の仕事に従事し、この間に一般市民の花に対する気持やニーズを知ることができた。

4~5年経った時に同級生でサカタの野口博正君(35年卒)から専門学校で花の教師をやらないかと誘いがあった。場所は神奈川県藤沢市で自宅からは遠かったので単身赴任で行くことにした。そこは「日本ガーデンデザイン専門学校」で花卉の授業と実習を受け持ったが、教育は初めての経験で戸惑うことも多かった。種子まきから育てる栽培はスコップと鍬での手作り園芸で、学生と共に自分の学びでもあった。この学校には園芸学部同窓生の高橋雅雄氏(造園28年卒)、篠田朗彦氏(造園37年卒)、今西弘子氏(総農38年卒)、山田幸子氏(44卒)、武内嘉一郎氏(51年卒)が講師として活躍されていた。

この学校は造園を教えていたので自分も庭に関心が高まった。花を育て庭に活かすことをもって学生に体験させたいと思い、フラワーガーデンを試みたりして、老骨の4年間の勤めを終えて、昨年自宅に戻った。

今思うと纏まったことは無かったが、花一本の道だったのが幸せだと思っている。花と緑には面白いことがいっぱいある。これからもずっとやり続けようと思っている。

終りに、この文を書いてみて多くの園芸学部同窓の活躍があり自分が支えられて来たことを改めて感じた。名前を上げられなかったが、ご指導を受けた各界諸氏に感謝致します。